



たかほし てるみ
高橋 照美氏
(72歳・木原)

(*市内の小学校・コミュニティーセンターで戦争の語り部として活躍中)

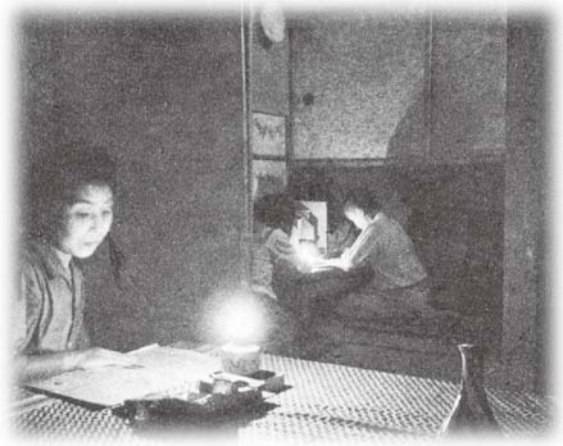
今年も戦後62回目の8月がやってきました。私が毎年思い起こすのは、戦場での体験ではありませんが、一九四四年（昭和19年）から一九四七年の戦中戦後に体験したこと、この目に映った光景です。国民学校3年生の時、米軍機に狙撃され九死に一生を得たこと、疎開前までの町が空襲で焼け野原となり自宅も消失したこと、広島原爆（ピカドン）投下一か月後の夕暮れ、外壁しか残っていない広島駅頭から見た市内、あちこちで死体から立ち上る薄紫の火の玉、鼻につんとくる異様な臭いの記憶、一九四七年（昭和22年）小学校6年生で東京に移り住み、上野駅地下道での光景は、壁に沿って地面に横たわっている空襲で親兄弟を失った孤児達、声をかけても返事がなく、よく見ると栄養失調などで息を引き取っている子供達、すっぱい臭いのする地下道の悲惨な姿を見たことなど今も脳裏から離れません。

市内在住のジャーナリスト 高橋照美氏が綴る戦争・・・

戦争を知らない世代に「語り部」が伝えます



終戦当時の農作業風景(沖渡地区)

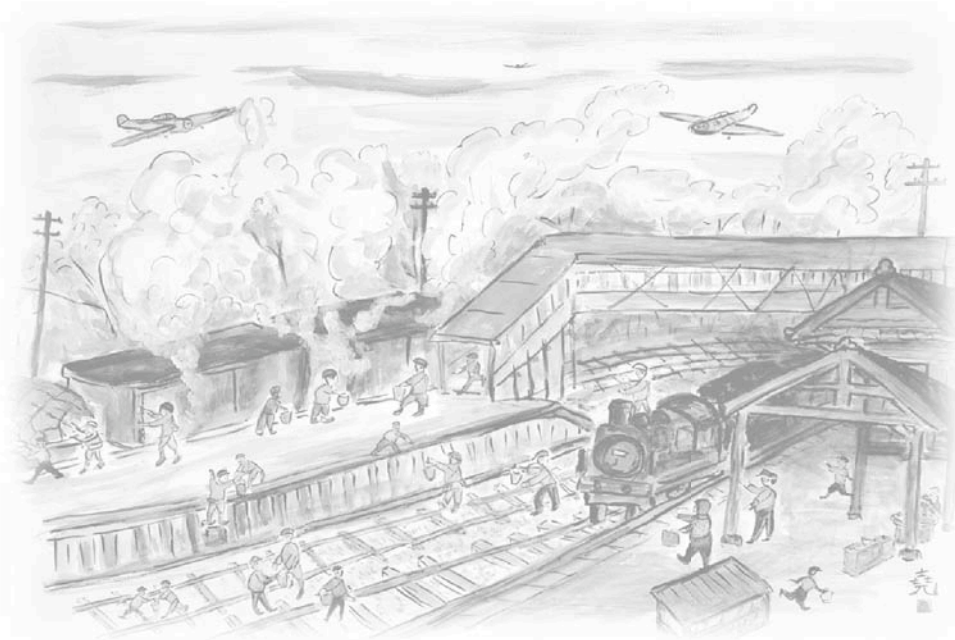


昭和23年 中学1年時の筆者

魔の8月13日 成東駅爆破

一九四五年（昭和20年）8月13日午前11時40分頃、九十九里浜方面から飛来してきた米軍機グラマン数機が成東駅下りホームに停車中の軍

あたち たかし
足立 堯画



用列車6両編成にむけて、数回の反復機銃掃射を繰り返して日向方面に飛び去った。

列車には高射砲4門、火薬2両が搭載されていた。その時火薬車両から煙りが上がりその18分後の午後11時58分大音響とともに大爆発が起こり、あたり一面吹き上げた砂塵と土煙りで薄暗くなるほどだったという。

駅舎はもちろん、ホーム、線路、また上りホームに停車中の客車もろとも跡形もなく飛び散り、後には直径約10m、深さ10mの大きな穴が残ったという。

その日駅舎には長谷川駅長以下15才から18才までの女子3名、14才から19才の男子5名の若い職員を含む15名の職員が駅務についていた。その時、被弾した火薬車両から煙りが出たため通報を受け、かけつけた兵士27名が加わり全員で懸命に消火作業に当たったが18分後一瞬にして駅長以下職員14名と兵士27名が地上から消え去った。

終戦まであと2日というのに無念でなりません。戦争とは、この自然に囲まれた平和な山里であろうと、一瞬にして見境なしに人の命を奪うことです。

戦争は決してやってはならないこと、これは私ども戦争を知る世代が少なくなりつつある昨

今、改めて戦争の無意味さを語り継いでゆかなければなりません。戦争と平和を考える時、平和のつぎにはもう戦争が待っていることも知っておきたいものです。

終わりに成東駅爆破で亡くなられた42名の御霊のご冥福をお祈りいたします。

資料参照：春秋倶楽部発行「成東駅爆破物語」より

注：旧国鉄職員の慰霊碑は山武市成東本行寺

旧陸軍兵士の慰霊碑は山武市成東元倡寺

山武市の明治維新から太平洋戦争までの戦没者：山武市一五〇四名（成東六六一名、山武三一四名、松尾三二五名、蓮沼二〇四名）
千葉県 五七八二八名